(4) 大刀・刀子の刀装について

徳江秀夫

綿貫観音山古墳の玄室からは4振の大刀が出土したことは第3章4に報告したとおりである。注意されることは、玄室南東隅寄りの奥壁に立てかけられていた大刀を除く3振が頭椎大刀、捩り環頭大刀、三累環頭大刀といずれも装飾付大刀であったことである。古墳時代後期、本古墳と同時期に築造された古墳には複数の装飾付大刀が副葬される事例は関東地方を中心に少なくない。ただし、本古墳が単独葬であるとすれば、一被葬者[註1]に伴う複数種類の大刀副葬の報告は被葬者の社会的位置づけや性格を考える上で貴重な資料となるものである。

本古墳出土の大刀類については既に多くに研究者の研究対象となり、多数の所見が発表されている。個々の観察内容については第3章4に記したとおりであるが、ここではその特徴を再説するとともに先行研究の成果を踏まえ、現在の研究上におけるこれらの大刀の位置づけについて簡単にふれてみたい。

頭椎大刀は柄頭と柄以下の装具が分離しているが全長117.5cmに復原される資料である。その特徴としては、7枚の板金から構成される金銀装の柄頭、銀線柄纏の柄間、喰み出し鍔の範疇に入ると考えられる断面蒲鉾状の厚みを有する鍔、全体を金属板で包まない鞘の外装などがあげられる。柄頭や鍔などに「木彫金張り技法」、「双直線刻み目文[註2]」が多用されている点は後述の捩り環頭大刀や栃木県別処山古墳出土大刀と同様である。柄本や鞘間の責金具には「双連珠七魚文」を施している。佩用にあたっての足金物が無く、鞘金具の佩裏に紐を通す孔が切開されていることもこの大刀の特徴の一つであろう。

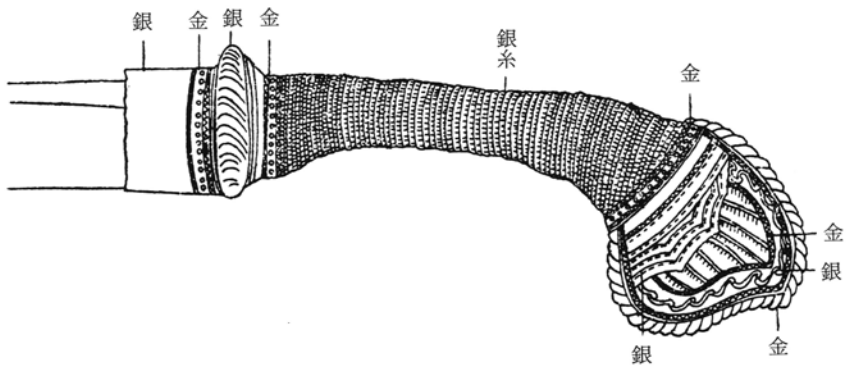
町田章氏は、島根県岡田山1号墳出土の装飾付大刀を考察する中で本資料を倭式円頭A IV 型式と分類し、別処山古墳出土大刀とともに円頭大刀から頭椎大刀への過渡期のものと考えた。[註3]

穴沢咏光・馬目順一両氏は、本資料と陝川玉田M3号墳出土の単鳳環頭大刀との関係を指摘した。柄頭の柄寄りを覆った板金のあり方や柄の刃側が彎曲する状況に共通性を見いだし、本資料が環頭大刀と円頭大刀が組み合わさった形状であるとしている。[註4]

金銅装頭椎大刀の系譜あるいは編年に関する研究は、穴沢咏光・馬目順一両氏、新納泉氏、桜井達彦氏、滝瀬芳之氏らにより柄頭の形状や鞘部分などの装具の変遷に着目した検討が進められている。[註5]

その中で新納氏は、金銅装頭椎大刀は、頭椎形の木装大刀に捩り環頭大刀の柄頭に付くC字形の捩りを施した金具が筋金として採用され、柄頭全体が金銅装となったあとは、筋金部分は畦目状となって残ったものと推定している。本資料や高崎市隠居山古墳出土例は筋金部分が畦目状に変化する過程での過渡期の資料として位置づけている。

新納氏や桜井氏の型式学的検討の成果では、金銅装の頭椎大刀は、6世紀後半に出現したと考えられることから、本資料の製作時期も定型化した金銅装頭椎大刀が出現する前段階、須恵器のTK43型式に併行する時期に位置づけられ、玄室内出土須恵器の



第184図　総社二子山古墳出土頭椎大刀

年代観と大きくは矛盾しない。

ところで、頭椎大刀は、上記の研究者をはじめ多数の研究の中で全国的な資料集成がおこなわれているが、本資料と同様の形状、意匠をなすものは前橋市総社二子山古墳出土例のみである。この大刀は現存しないが、『劔大明神』と呼ばれて描かれた木版図の模写に拵えの様子、装具の材質の細部にいたるまでが記録されている。この絵図によれば、総社二子山古墳大刀は、「全長4尺6寸6分、剣身3尺6寸、柄長さ9寸3分」と記録されている。[註6] 材質は本資料とほぼ同一で、懸通孔が表現されていない点を除くと縁金具の文様表現にいたるまでほぼ共通しており、その製作にあたっては本資料と共通の製作工人、工房が係わっていた可能性が高い。佩裏の状況、佩用装置についての表現はないため詳細は不明である。このような意匠の類似性については既に石川正之助氏や滝瀬芳之氏らに指摘されている。[註7]

総社二子山古墳は、総社古墳中群に所在する全長約90mの前方後円墳である。内部主体は前方部、後円部の各々に構築された横穴式石室である。

頭椎大刀は、江戸時代1819（文政2）年に前方部の横穴式石室から直刀2、刀子2、勾玉4、金環1、銀環1、鈴釧1、鉄鏃2、須恵器脚付長頸壺1・坩1、瓶1・提瓶1、瑁1、高杯3などと共に出土している。

総社二子山古墳の後円部主体部は、綿貫観音山古墳同様、角閃石安山岩の5面削りの加工石材を使用して、側壁、奥壁が構築されている。石室の特徴や前方部出土の副葬品の内容、埴輪の存在などから6世紀後半の群馬県を代表する首長墓の一つと考えられる。

前方部の横穴式石室の築造は後円部横穴式石室より後出と考えられていることから、綿貫観音山古墳より前方部石室の構築時期はやや新しく位置づけられる可能性もあり、両者から出土した頭椎大刀には副葬時期に若干の時間差が生じる余地も残るが刀装の内容からはその差を見出し難い。

いずれにしても本資料と総社二子山古墳出土大刀は、金銅装で倒卵形の柄頭を一体の金属板から形作る頭椎大刀の製作開始直前のものとして先学の研究の中では位置づけられている。

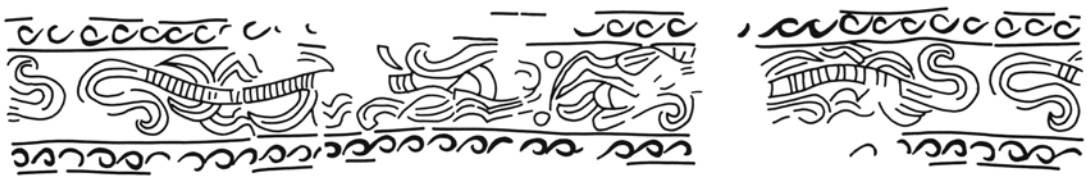
なお、本資料刀身の鎚本の周囲に銀象嵌の装飾を施した事例については橋本博文氏が資料の集成、考察を行っている。[註8]

捩り環頭大刀は、刀長113.2cmを測ることから、この大刀の全長は120cmを越えるものと推定され、前述の頭椎大刀の長さとほぼバランスのとれた数値となろう。柄頭端部、小口の平面形は楕円形を呈するものと考えられ、静岡県団子塚古墳出土の鹿角装大刀や奈良県藤ノ木古墳出土の大刀3に類似するものと考えられる。ただし、鞘部分は藤ノ木古墳とは異なり金属板を要所にのみ使用しているもので、前述の頭椎大刀と同様の拵えで、鞘木全体を金属板で覆ってはいないものである。その中で鞘口・鞘尻の両金具に鉄地銀象嵌が施されていることが本資料のもつ最大の特徴である。

細部の技法では、「木彫金張り技法」、「双直線刻み目文」など栃木県別処山古墳出土大刀との共通点が多い。

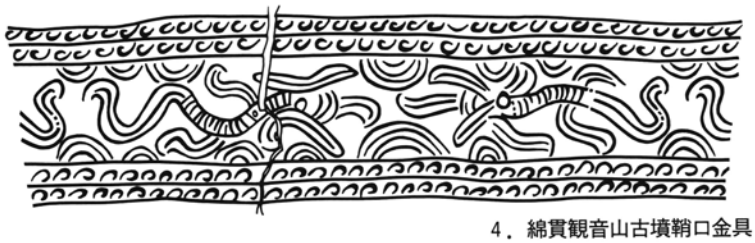
捩り環頭大刀の出土例は、永井義博氏により、1994年の時点で36例が集成されている。[註9] その後、群馬県では2例の増加があることからみても、全国的にも新事例の発見があるものと考えられる。群馬県内では、大泉町古海原前1号墳出土例、高崎市八幡遺跡70号住居出土例、高崎市綿貫町出土例、前橋市前二子古墳出土例、安中市簗瀬二子塚古墳出土例と本事例の合わせて6例が確認されているが、いずれも環頭につくC字状の金具のみの残存で刀装全体を比較できる資料はない。出土古墳の判明している4例のうち、本古墳を除く3例は、6世紀前葉に築造された古墳であり、群馬県における捩り環頭大刀の普及がこの時点で首長層に対し始まっていたことが理解できる。各古墳の築造年代からみると綿貫観音山古墳例は群馬県内出土例の中で最も新しい段階での出土となり、一時期前の刀装の内容が踏襲されていることがわかる。

1．井田川茶臼山古墳

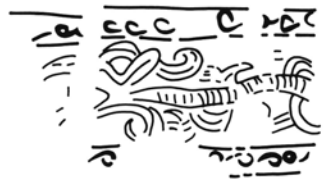


2．河内愛宕塚古墳

3．綿貫観音山古墳鞘尻金具



4．綿貫観音山古墳鞘口金具



5．明ヶ島15号墳

第185図　銀象嵌龍文（縮尺３分の２）

ところで、捩り環頭大刀の中でも、本資料同様、鞘口金具、鞘尻金具に龍文の銀象嵌を施した刀装具を拵えた事例は、現在までに５例が知られる。それらは、三重県亀山市井田川茶臼山古墳例、大阪府八尾市河内愛宕塚古墳例、静岡県磐田市明ヶ島15号墳例、奈良県高取町市尾宮塚古墳例と本資料である。

町田章氏は、井田川茶臼山古墳出土刀を考察する中で龍文の変遷過程の中に本資料を位置づけている。[註10]

小林義孝・有井宏子両氏は、河内愛宕山遺跡古墳出土例を報告する[註11]中で、市尾宮塚古墳例を除く４例について、龍文の文様変遷を型式学的に検討し、これらの資料を同一系譜上にある文様が退化していったものとの見地から、その製作順序を提示している。その順序は、井田川茶臼山古墳例（６世紀前半）、明ヶ島15号墳例（６世紀前から中頃）、河内愛宕塚古墳例（６世紀中頃）、綿貫観音山古墳例（６世紀後半）である。また、これらの大刀は近畿地方において製作され、近畿地方の中枢勢力から地方の各地に配布されたものと考えている。龍文に関する小林・有井両氏の見解は、その変遷過程を正しく分析、理解したものであり、本資料の位置づけについては充分首肯できるものであり、本資料の龍文表現は確かに「龍の形質的特徴に対する理解不足」である。

市尾宮塚古墳例については正式報告がまだ出されていないが鞘口の金具と思われるもので、中央に主文の龍文を配し、両縁部寄りに二条の直線を一周させ区画線とし、その中にＣ字文あるいは蕨手文を配

する構成は井田川茶臼山古墳例と同様であるが二重の弧からなる点は他に例を見ないものである。

三累環頭大刀については第3章4に記したよう本資料と同形の三累環頭大刀の柄頭は、群馬県内では現在、本資料を含め6例が知られる。[註12] 高崎市綜(『上毛古墳綜覧』の略) 倉賀野町185号墳例、高崎市綜滝川村2号墳周辺古墳出土例、多野郡吉井町出土例、伝群馬県内出土例、群馬県内出土例である。

本古墳出土例以外はいずれも中・小規模の古墳出土、あるいはそれが推定される。

本古墳出土の刀子は、柄頭の装具の相違から銀装刀子、鹿角装刀子、木装刀子に分類できることは第3章4に報告したとおりである。

5口の銀装刀子は、奈良県藤ノ木古墳と同数が金銅装鈴付太帯に接して出土したことが既に注目を集めてきたところである。これらは柄頭の形状が軸の長い円頭状を呈する点では共通するものの、法量、細部の形状のあり方から2細分が可能である。鞘部分は鞘口、鞘尻等の要所に金属板を使用するいわゆる準素鞘である点は本古墳出土の大刀類と共通にする刀装である。

金属装刀子の出土事例については悉皆的な調査を行っているわけではないが、群馬県外では藤ノ木古墳の金銅装刀子5本[註13]の他に栃木県横塚古墳出土例[註14]（銀装の柄、銀線巻の鞘を有する資料)、埼玉県小見真観寺古墳出土例[註15](銀装、圭頭状柄頭)、千葉県丸山塚古墳出土例(銀装、圭頭状柄頭)[註16]、岐阜県大枚1号墳出土例[註17]（金銅装)、奈良県コロコロ山古墳出土例[註18]（金銅装)、島根県平ガ廻横穴墓出土例[註19]、同放れ山古墳（金銅装）[註20]を知り得た。

群馬県内では高崎市下滝2号出土の2例[註21]（両者とも金銅装、1例は圭頭状柄頭)、高崎市八幡観音塚古墳出土例[註22]（銀装、圭頭状柄頭）の4例、高崎市剣崎町出土例[註23]（銀装、圭頭状柄頭)、旧多野郡八幡村（現高崎市）出土例[註24]（金銅装）が知られる。

これらの資料の形状をみると柄頭、鞘部分の形状により大別が可能と思われる。一つは筒状の柄頭を有するもので、平ガ廻横穴墓例に代表されるもので、全体が刃側に強く彎曲している。これらは革装鞘を装備した刀子の装具を金銅装に移したと考えられるものである。高崎市下滝2号墳出土例は柄頭、鞘口、鞘尻と装具の一部に金属板が使用された事例である。もう一つは柄頭が圭頭あるいは円頭状を呈する事例で、柄から鞘にいたる屈曲は弱いものである。これにも藤ノ木古墳例のように全体を金属装とするものと、小見真観寺古墳例のように装具の要所を金属装とした事例がみられる。

類例については以上とおりであるが、現時点では県内外において本資料と同型をなす資料の存在を知ることはできない。朝鮮半島、中国大陸における出土事例についても限定された中ではあるが文献探索を行ったものの類例を知り得なかった。町田章氏が伽耶式円頭大刀[註25]とした昌寧校洞11号墳や島根県岡田山1号墳出土円頭大刀の柄頭の状況は、匙面形の板金2枚を合わせ、その合わせ目にベルト状の板金を巡らしており、本資料と類似する点が認められる。今回はこの点のみを指摘し、本資料の系譜、型式学的位置づけについては今後の検討課題としたい。

群馬県内ではこれまで装飾付大刀あるいはその一部と考えられる刀装具の出土が261例（1993年時点）を数えることができる。[註26] この中には明らかに7世紀後半や8世紀代に製作されたと考えられる方頭大刀や蕨手刀等が含まれているが、現在はこれらを除いても古墳出土の装飾付大刀は200例を越えているものと考えられる。これらの刀装具は伊勢崎市台所山古墳出土の象嵌装大刀や高崎市倉賀野町出土の双龍双鳳環頭大刀などの一部を除くとその大半が6世紀後半から7世紀前半に製作されたものである。

これらの装飾付大刀の分布や製作地の問題については、近畿地方の大和王権とその周辺勢力の支配下にある工房で作られ、それが威信財として地方の首長層あるいは有力者層に配布されたとの見方が有力である。これに対し、勝部明生・鈴木勉は「渡来系の大刀装具」が広範囲に分布する背景には刀装具の技術者の地方への移動があるとの考えを示し、綿貫観音山古墳出土大刀については柄頭の「木彫銀張り

装」を倭装系の技術者が、柄の「連珠銀線葛纏」を渡来系の技術者が担当した折衷の装飾付大刀であるとしている。[註27] 傾聴すべき点の多い指摘と考えるが、現時点では原材料の入手や装具個々の製作地について調査成果の充実を待って再度検討するべき課題としたい。

最後に、古墳の副葬品の組成は、前期古墳から時間を追って徐々に変化していることは周知のことである。群馬県における古墳時代後期、最終段階の前方後円墳における副葬品についてみると、以前から副葬されていた鏡や鉄製武器・武具とともにその主要部分を構成するものとして金・銀・金銅、あるいは鉄地金銅張を素材とした装飾性の高い装身具・大刀・馬具・容器類が多数みられるようになる。また、その中には中国大陸や朝鮮半島にその系譜が求められるような稀少性の高い遺物が含まれることも知られている。本綿貫観音山古墳出土の装飾付大刀や銀装刀子は、同時に副葬された銅製水瓶や金銅装鈴付太帯などと共に6世紀後半における首長墓墳の副葬品組成を特徴づけるものとしてその時代性を先取りした資料と言える。

註1　第3章11に森本岩太郎・平田和明両氏による人骨・歯片に関する鑑定内容が報告されている。これらは、性別不詳の壮年期後半ないし熟年期の成人1個体分と推定されている。

註2　勝部明生・鈴木　勉『古代の技―藤ノ木古墳の馬具は語る』1998
註3　町田　章「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会　1987
註4　穴沢咏光・馬目順一「陝川玉田出土の環頭大刀の諸問題」『古文化談叢』第30集(上)　1993
註5　穴沢咏光・馬目順一「頭椎大刀試論―福島県下出土例を中心として」『福島考古』第18号　1977
新納　泉「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号　1984
桜井達彦「頭椎大刀の編年に関する一考察」『比較考古学試論』1987
滝瀬芳之「終末期の前方後円墳と飾大刀」『日本古代文化研究』第3号　1986
註6　田沢金吾「上野国総社二子山古墳の調査」『日本古文化研究所報告』4　1937
註7　石川正之助「総社二子山古墳」『群馬県史』資料編3　1981および註4の滝瀬論文
註8　橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌円頭大刀・小刀及び鎚本を象嵌装飾する大刀と佩用者の性格」『板倉町史』通史編上　1985
註9　永井義博「捩り環頭大刀」『団子塚9号墳出土遺物保存処理報告書』磐田市教育委員会　1994
註10　町田　章「三重県井田川茶臼山古墳の鉄地象嵌捩じり環頭大刀について」『井田川茶臼山古墳』三重県教育委員会　1988
註11　小林義孝・有井宏子「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀―龍文象嵌鞘金具付捩り環頭大刀―」『研究紀要』7号　八尾市歴史民俗資料館　1996
註12　穴沢咏光・馬目順一「三累環頭大刀試論」『古文化論叢』1985
註13　斑鳩町教育委員会『斑鳩藤ノ木古墳第2・3次発掘調査報告書』1995
註14　東京国立博物館『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東Ⅰ)1980
註15　東京国立博物館『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東Ⅲ)1986
註16　同上
註17　埋蔵文化財研究会『古代の対外交渉』第Ⅰ分冊（資料編）1989
註18　日韓交渉考古学研究会編「[共同研究]古墳時代日韓交渉の考古学的研究」『古文化談叢』第39集　1997
註19　蓮岡法暲「木次町平ガ廻横穴について」『八雲立つ風土記の丘』№107　1991
註20　島根県立八雲立つ風土記の丘資料館「島根県馬具、金銅・銀装大刀、金銅製品出土地名表」『黄金に魅せられた倭人たち』1996
註21　東京国立博物館『東京国立博物館図版目録』(関東Ⅱ)　1983
註22　観音塚考古資料館『観音塚古墳と出土品』1995
註23　註20文献と同じ
註24　末永雅雄『日本上代の武器』1941
註25　註1文献
註26　徳江秀夫「上野地域における装飾付大刀の基礎調査」『研究紀要』10　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992
註27　註2文献